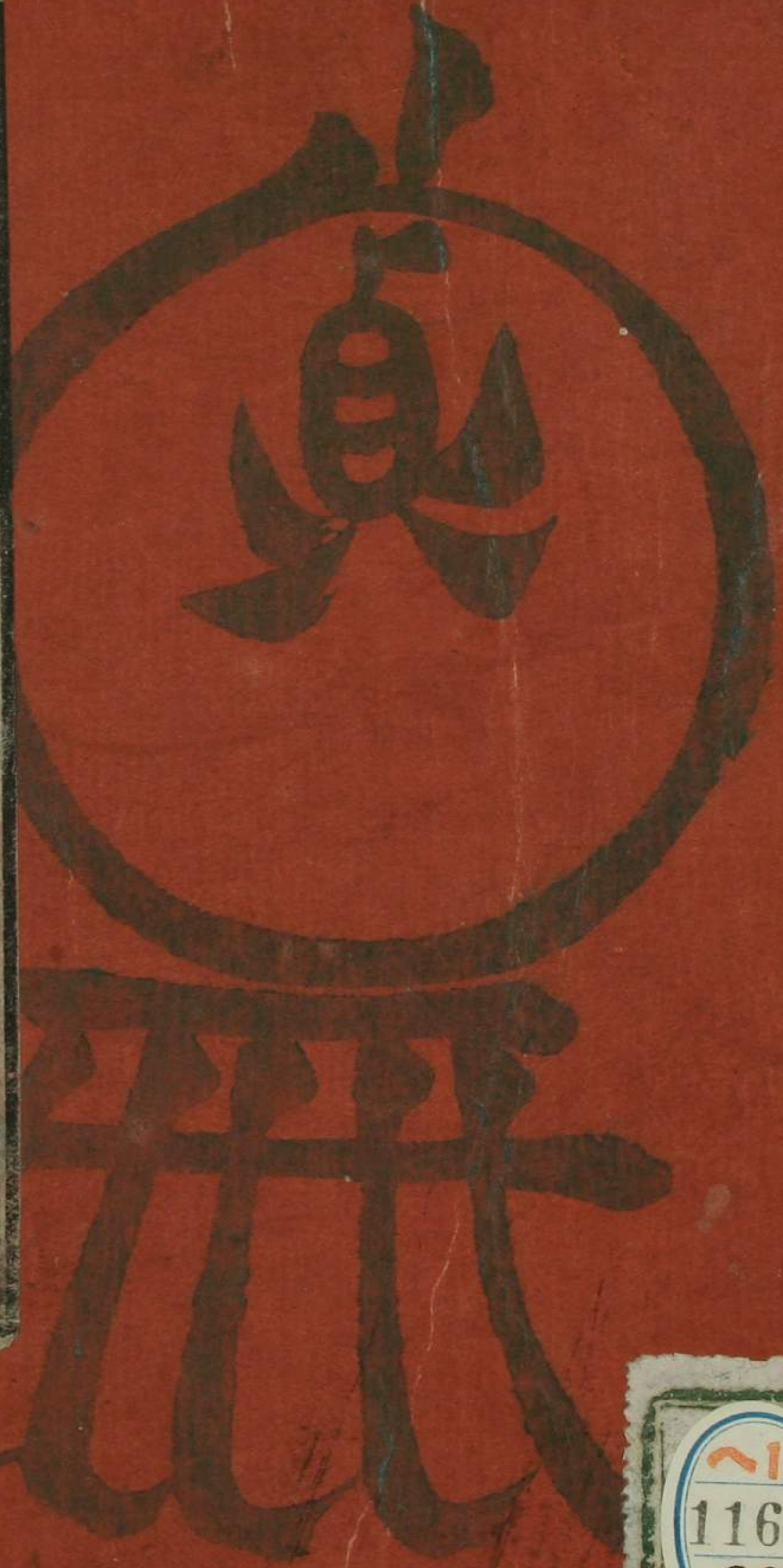


奥  
道中膝栗毛三篇

上





1164  
60



〇 齊 氏

請うかがひ 寫うつ 亮や 每ごと 晨あけ 夜よる 抱かか 膝ひざ 長なが 嘯うそ と 八やち 蜀しやく 志し の  
 辞ことば さくしんささもあ〜ゆ 此こゝ 床とこ 中なか 可べし  
 膝ひざ と びら びら びく 杖やゝ の つゝ 冬ふゆ 新あらた 撰えら  
 六む 帖てい の 哥か の 角かく 膝ひざ 丸まる の 太ふと 刀やいば の 漁いさ 家や 託たく  
 重ちゆう 谷やう 膝ひざ 折ひ の 里さと と 河か 越こ 街まち 道みち の 名な

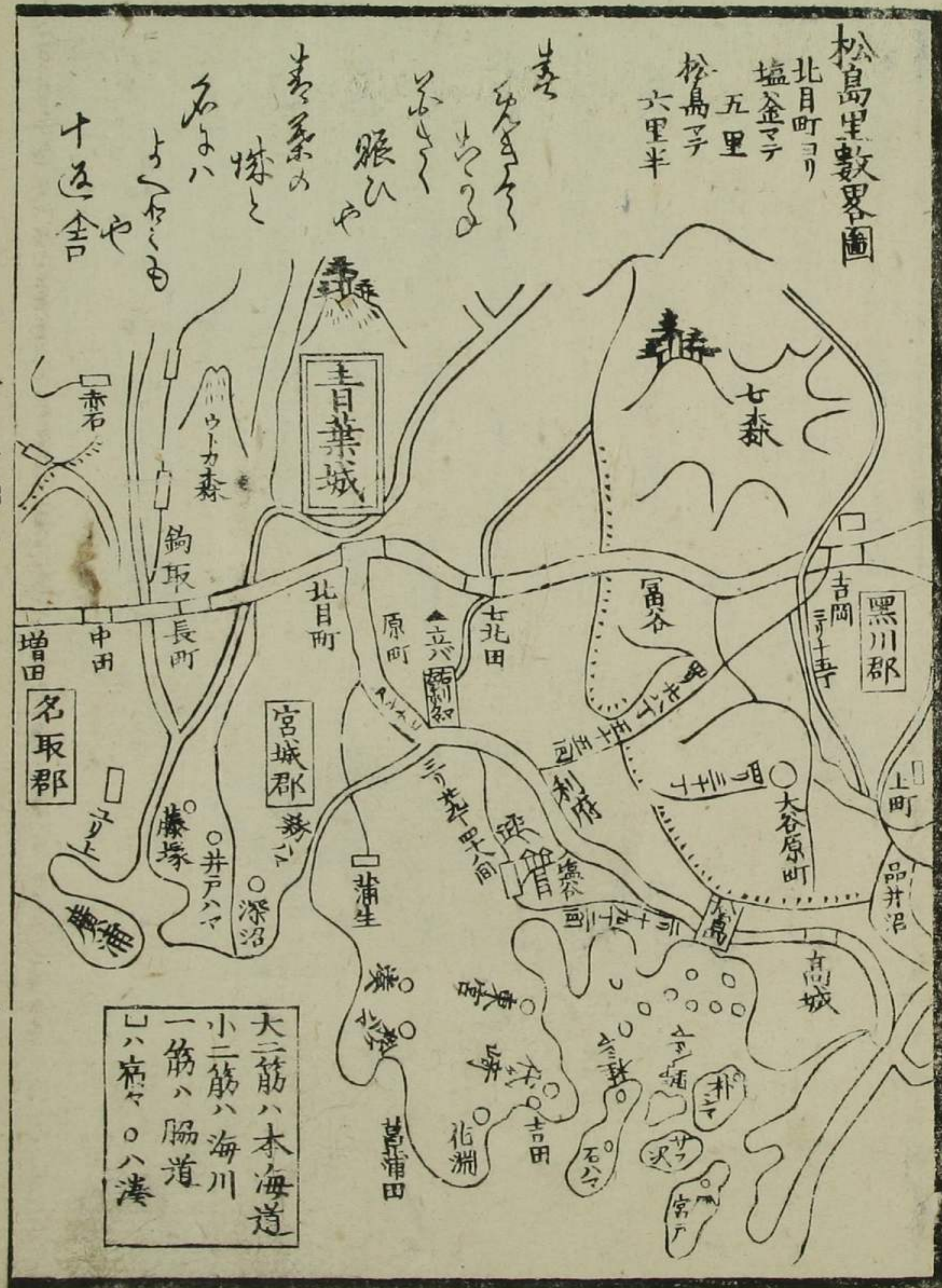
三 勢 序 一



しつゝ 搦づくつゝと八百屋のむまめ  
紙衣のひうち 搦のささるゝ 搦伊の衣裳  
なふるゝ 搦と拍く感んゝ 搦哉  
くづゝ 衆人笑ふ 搦栗毛の滑稽  
今なきとさへは 花の御江戸の御搦え  
の 松島紀行は 新奇妙案なるなり

作者と摩自物 搦や伏く口で聞るゝ  
ちよとんもゝとよむ時ときく人小搦の  
まむとあぶえの 搦す吹売屋なるぬ  
搦小僧の人面瘡その口あけは 序文  
の 一編とよむや 搦とも 談合  
七重の搦と八重とととむゝもきぬぬ





十返舎一九ぬの雲のりくろくく綾彦  
とく仙其至者膝容をりけ子柿真亭  
りまるとり

弘化五年  
まのり

黒川郡  
文長



皇和魚譜 云石伏魚 八閩通志

山川ノ清流ニ生ヌ味美ナリ

焼キ風乾ノ味曾汁ニ調レ食フ

其鱈亦佳ナリ塩蔵ノ遠キニ寄ヌ

ベシ庖丁聞書ニカシカニ竹ノ子白瓜

ナド入レ汁ニ調スヲ越川汁ト云ト云リ

案ニ此魚夜鳴声アルニヨツテ

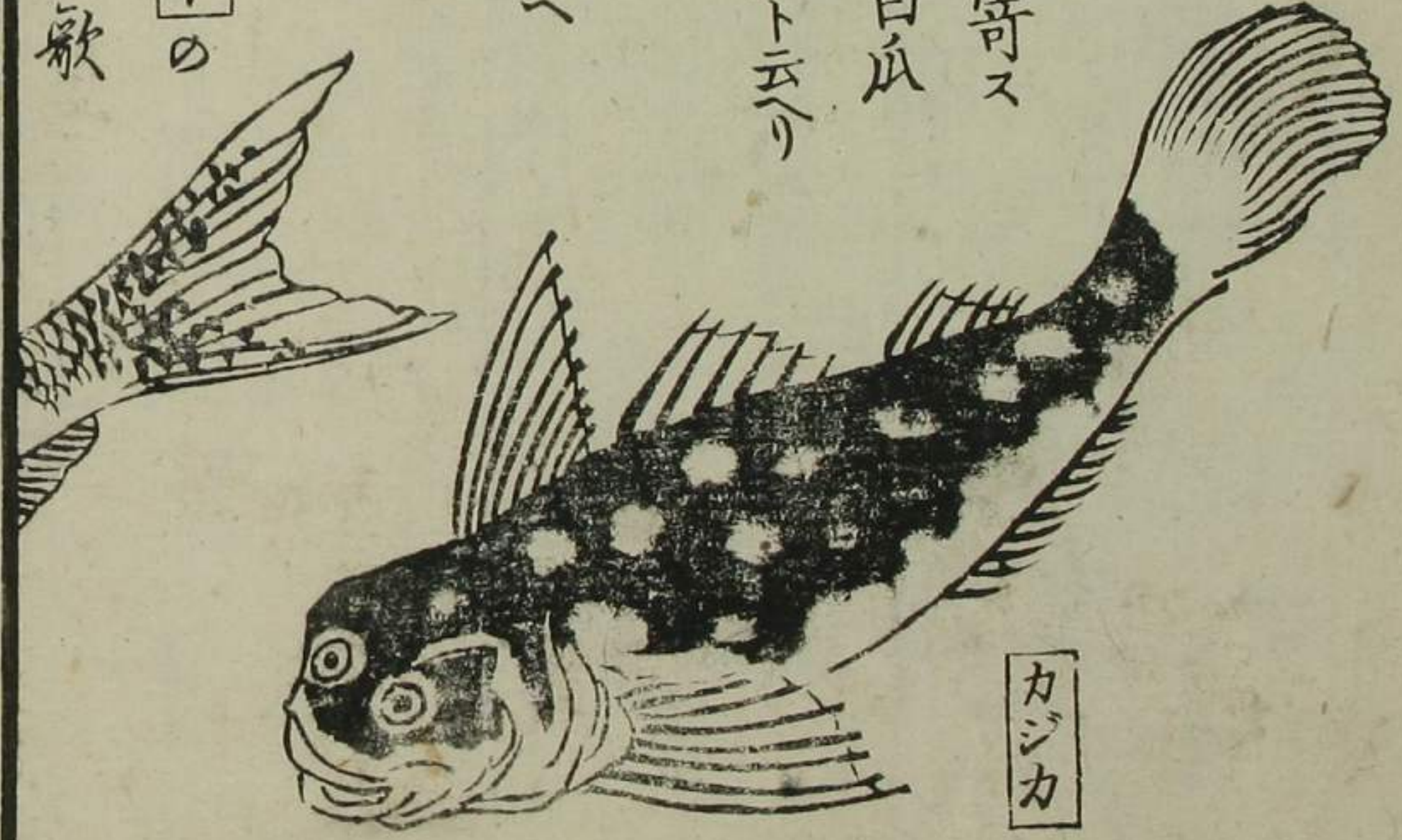
カシカト呼フコシ古クヨリ云傳ヘ

古歌ニモ見テ雖モ其鳴ク

モノハ河蝦ニ決メ此魚ニハ

アラヌ云々 貝系ノ類ガ **大和本草** の

杜父魚ノ条ハ河麻トシテ古歌



一もよめりとのみ候あり於此編ハ  
委くつて

沙濱魚スナムグリト名ク流水

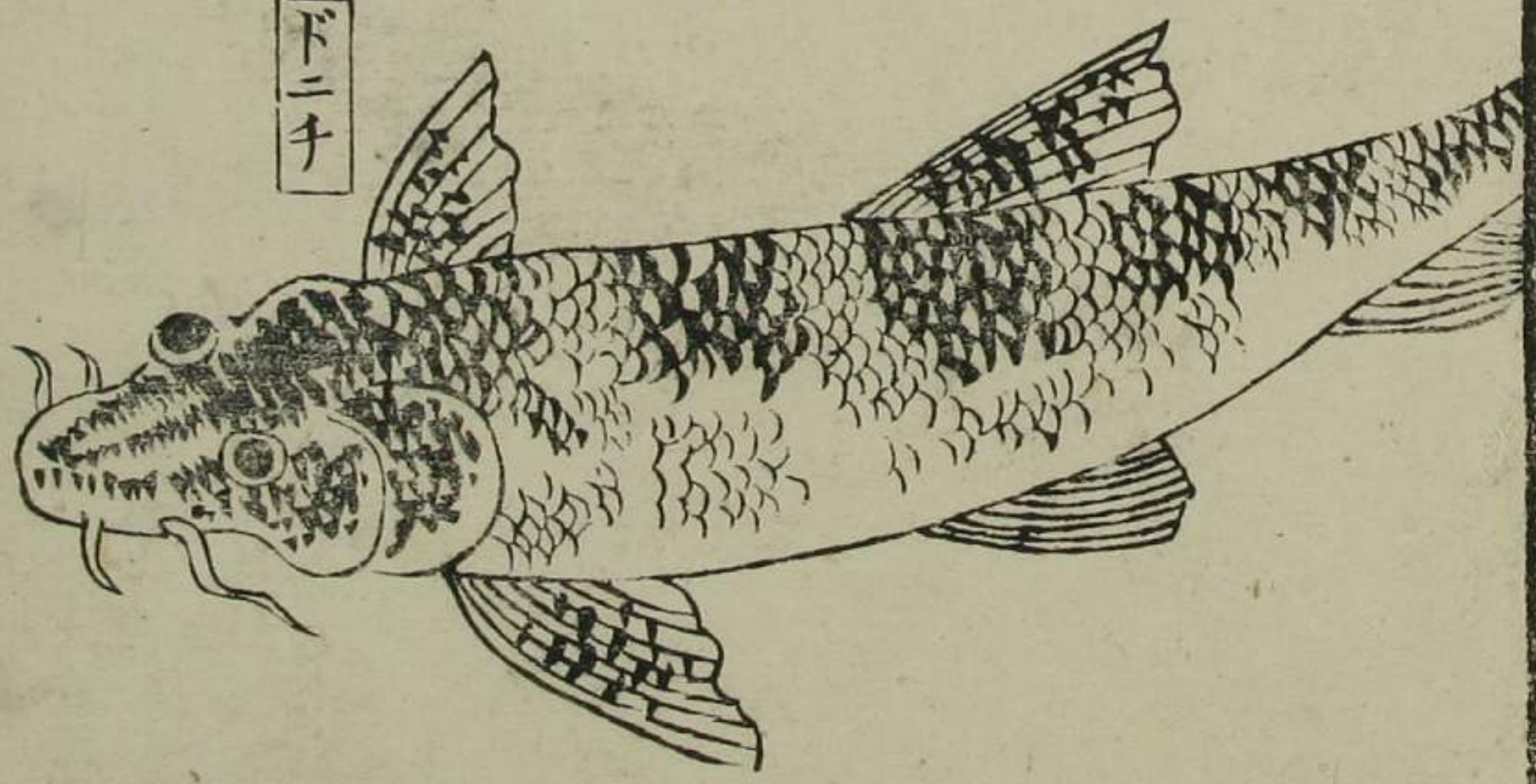
中ニ多シ常ニ地ニ附テ上ニ泳ガヌ

或沙中ニカクル羹ト爲ノ味美ナリ

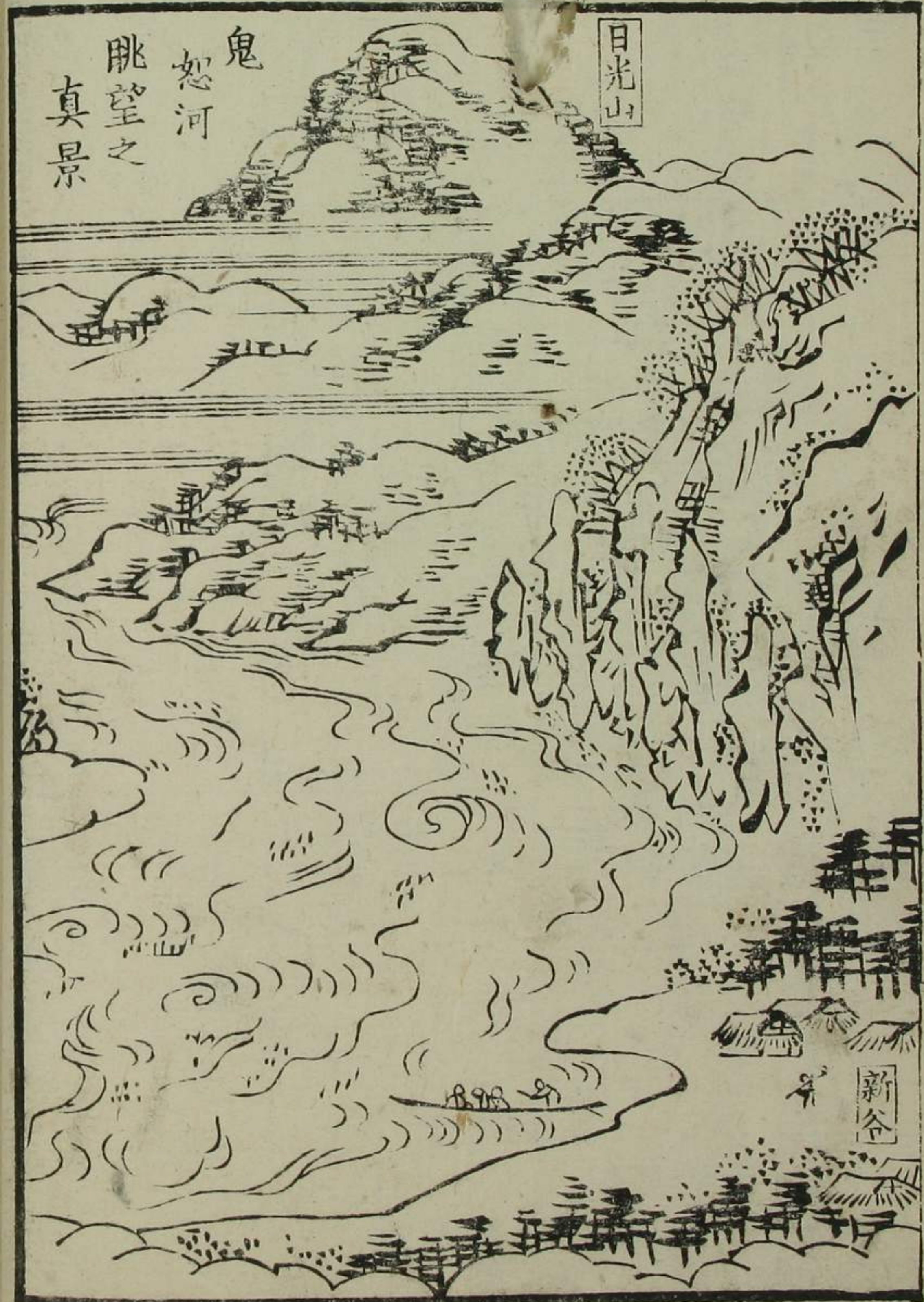
濱魚トハセト訓ルハ非ナリ 皇和魚譜摘要

ハ魚國々みよりて是名をさめ

わらわの中み下野ヲセドニチとつ











三瓶

氏一筆

星屋



新古今

陸奥此いそぐ志のいんをそとね  
かきつけくしてよき此い〜〜

右大將頼朝

此書元松島見物ヲ發端トシタレバ  
 奥羽ノ風土舊跡ヲ委ニスベシ白坂地ノ  
 九例条 驛路神社佛閣ハ云モ更也名所名  
 物等趣向ノ筋ニヨラザルハ畧之  
 此編ニ鬼怒川ノ真景ヲ抽出シ且魚類二種ヲ寫生シテ  
 載タルハ第四編ノ趣向ニ用井ルノバナリ且山家者ノ  
 方言今ハサレ不通ノ詞モアサレ共カ、ル類ハ二笑ニ  
 備シ為ナリ 弘化四年十月十二日

道中膝栗毛第三編卷之上

十返舎一九著



東海道名所記

小名物の酒肴煮る焼賣以病〜ありとかんえ  
 ころを林へ煮るり酒屋といふものゝ名く〜活の昔ありあり  
 とおぼもさまで名所記あるがう豆腐煮雞のおぼりりのおぼり  
 いひもやあや暮とさだ名ら〜替へる焼餅子焼をれ〜小  
 か〜る〜名所記の立場居酒を〜せある〜け〜橋上





子の會席の欠と云々を杖戸の宿の丁金橋小弥次郎を誘は  
 るべしと血乃とあげて大書こゑあしこしてめんがいくら危やうあしこ  
 らうといへい鼻の替ひつきこの縁ひさか考へこの  
 づいあしことそれらうあしこにうて行くあしこらや  
 一話あしこ余りそれぢやアお茶の鼻がさうあしこは來さあしここ中  
 りかゆあしこぞうあしこてよあしこうあしこあよあしこの方あしこ曲あしこてゐあしこてあしこんあしこともあしこねあしこドレ  
 ちよあしこと直あしこてあしこ中あしこらうあしこ一あしこ手あしこおあしこ換あしこてあしこ置あしこかあしこまあしこつあしこてもあしこ異あしこらあしこか  
 らあしこそれあしこづあしこてもあしこ友あしこ達あしこづあしこてあしこよあしこそあしこんあしこかあしこ曲あしこてあしこ鼻あしこであしこまあしここあしこらあしこ

ひよあしこと破あしこ落あしこ小あしこをあしこゆあしこかあしこつあしこ時あしこかあしこまあしここのあしこ宿あしこをあしこ小あしこめあしこんあしこがあしこ後あしこ  
 一あしこ手あしこはあしここあしこのあしこ鼻あしこつあしここあしこであしこひあしこかあしこやあしこ先あしこのあしこ後あしこがあしこ一あしこ目  
 月あしことあしここあしこらあしこれあしここあしこちあしこやあしこ後あしこ曲あしこらあしこうあしこがあしこ換あしこをあしこむあしこらあしこうあしこが  
 そあしこつあしこらあしことあしこ犬あしこのあしこ糞あしこのあしこねあしことあしここあしこのあしこてあしこらあしこらあしこらあしこらあしこ世あしこ話あしことあしこやあしこら  
 てあしこらあしこれあしこをあしこめあしこつあしこかあしこ余あしこりあしことあしこやあしこらあしこうあしこらあしこのあしこ中あしこがあしことあしこれあしこて  
 とあしこらあしこ今あしこ世あしこのあしこらあしこ小あしこ命あしこだあしこうあしこああしこらあしこてあしこらあしこめあしこまあしこらあしこ明あしこ目あしこのあしこ後あしこ  
 一あしこ手あしこはあしここあしこのあしこ鼻あしこつあしここあしこであしこひあしこかあしこやあしこ先あしこのあしこ後あしこがあしこ一あしこ目  
 まあしことあしこ流あしこがあしこ入あしこらあしこぬあしこまあしこらあしこのあしこりあしこもあしこ是あしこ切あしこ取あしこらあしこいあしこらあしこ













旧本今昔物語  
世人鼻缺様  
ト云ハ此事ヲ云

古今事類



細末の  
ふよふら  
いふ  
山花

此巻畢

古今事類



まじりしとんびりせしむ。お花が鼻をさすつぎし

阿房のせんを鼻缺とつぎしとらせらるる

遠ねしお花の鼻の裏つらつておる。お花の

る。何よりや鼻缺ぢやる。園子ぢやぞい鼻缺と

その園子のりや。お花さよをまほしお花ぢや園

ふと鼻缺といふる。お花は鼻缺といひお花四月

お花さよのりお花は鼻と鼻屎とといひお花

阿房のせんを鼻のりや鼻屎ぢやる。お花鼻と

いふて蓮の花の草花ぢやぞい。お花でも鼻屎でも

鼻屎おれが鼻のりや。お花は鼻のりや。お花は鼻のりや

お花は鼻のりや。お花は鼻のりや。お花は鼻のりや

大事を鼻といひお花は鼻のりや。お花は鼻のりや

お花は鼻のりや。お花は鼻のりや。お花は鼻のりや

病いえさせ進せると思ふ。お花は鼻のりや。お花は鼻のりや

系の西七条の大家の家さんぢやる。お花は鼻のりや。お花は鼻のりや



おましじが、何が大衆のこらあやさひ。医老般のまどついで  
 料治りょうぢのりやまじりやまじはまの彼明かあきらをせせごらもどごらもどの亦痲症まへんじが  
 めづしいめづしいこらも。自らの鼻があらうあらうさうかんさうかんのぢやいぢやい。  
 そのゆゑらうゆゑらうを同くかんかんを程ほどをうたの鼻ぢやけれど。  
 をこが痲症まへんじのりや病でたの鼻が一尺二尺いちぢふぢふもえさう  
 らえであうあうんのぢやいぢやい。又せませま医老いれうもあるのりや。  
 紀きが保たもたさるさるも医いがあらうあらうのりやぢやいぢやいそれそれをせせつれ  
 ましましと病びやうが病人びやうじんをむむ保たもたさるさるせせてておどおどりてりておどおどらら

とこらうとこらうをその医老いれう般はんがは病人びやうじんの醫新いしんとさうさうあをれあをれて  
 わるわる見るみるもさうさうとさうさうしんしんぢやいぢやいををその病人びやうじんがむむ保たもたさるさるで  
 玄けん関くわんへへまじまじとと身みをを医老いれう般はんのぢやいぢやいけけままどど自じ身しんをを玄けん  
 関くわんままととままじまじててササアアくくここららぢやいぢやいととさんさんせせヤヤアアららぢやいぢやい病人びやうじん  
 の鼻びやうがあらうあらうさうさうととさうさうままじまじ。レレ後ごををぢやいぢやいさんさんりりエエヤヤレレ  
 こらこらああのの根ね戸とへへ鼻びやうががつつつつええるる。ヤヤレレくくままいいかか鼻びやうぢやいぢやい  
 鼻びやうのの度ど間ま次じの間ま仲ちゆうの間まさうさうりりとと鼻びやうままじまじととぢやいぢやいとと  
 お通おとほししヤヤレレさんさんりりエエヤヤレレ病人びやうじんが鼻びやうととむむひひのの度どのの方かた



むげきんてを居るされヤンくわいせき一は鼻のこのは病人  
 ぢやとゆがえらうももの鼻とさつこらあ茶洞合一々  
 進歩すもよう養生をされませどこを鼻が日々低う  
 むらうひかなるうは鼻のつうえぬやう不度ぐとくこわお  
 瘻くござれとねんごらあて返まをとるその葉一日復  
 りのままなまふさく昔が鼻が低うもいつのまにコリヤとモウ  
 ぢの鼻ぢや病人が犯すつはさしとる医におるん  
 ぢや後まのてあその葉がきこらうごんまはと犯すの医

老どのお問やこれバ何が扱葉の利めぢやごんませぬヤ  
 けりのお説ぢとのふりぢやを遠近の医老どのいゝるまの  
 科治せうとあもひるさるで病生を考てままの鼻の  
 えらうかんめらそや皆病のせぢやさしより氣と縁め  
 て扱葉やさんせ何でこの鼻がさるいのかや門房らうの  
 あらひ低いさるを扱葉もさしひさしよ病人の病をさう  
 らかてる然ら鼻がごらうかんめらぢやその家科はさう  
 じやうもあ鼻とさつこらあて返まをとるその葉一日復







「は方がね」<sup>三</sup>「モウ一番やつけよう」<sup>三</sup>

「どうぞ〜」<sup>三</sup>「是でらう〜」<sup>三</sup>

「奇妙頂礼願頂礼願」<sup>三</sup>「有がと〜」<sup>三</sup>

「笑教さん」<sup>三</sup>「よ〜よ〜」<sup>三</sup>

「黄令家とありや〜」<sup>三</sup>

「二百年の元〜」<sup>三</sup>

「ね〜」<sup>三</sup>

「ね〜」<sup>三</sup>

「ね〜」<sup>三</sup>

「ね〜」<sup>三</sup>

「ね〜」<sup>三</sup>

「ね〜」<sup>三</sup>

「ね〜」<sup>三</sup>

「ね〜」<sup>三</sup>

「ね〜」<sup>三</sup>

「ね〜」<sup>三</sup>

「ね〜」<sup>三</sup>

「ね〜」<sup>三</sup>

「ね〜」<sup>三</sup>

「ね〜」<sup>三</sup>

「ね〜」<sup>三</sup>

「ね〜」<sup>三</sup>

「ね〜」<sup>三</sup>

「ね〜」<sup>三</sup>

「ね〜」<sup>三</sup>

「ね〜」<sup>三</sup>

「ね〜」<sup>三</sup>

「ね〜」<sup>三</sup>

「ね〜」<sup>三</sup>

「ね〜」<sup>三</sup>



その先聞の成るを考ぐぢうそ渡人一人の嫁ら。一  
目年がゆく世若き持て二度の勸小出と女席果と  
いさる所がよからう「そのついでれも飛通じがそら  
いさるまの奴がわれが」そのさう度の世界のころこ  
から後計もあるの。同外さる所の嫁であらう。あつと  
渡人者の嫁は夜金を出して去るところ。若量ハナ  
折目も人づき合何うからいひぶんあ。で亭もが  
真毛で染え。或日猿若町へ其居見物あつてあう

と女席の御機嫌とらふ。よろこばさうとおひの外むらと  
くいのま。おま繁とをむくふ不れあ。若くは若者の  
ヤシつけへ八月若花のあがめい各列その外の月ん物  
るの四度の徳の弁女の月ん物小非と対交因世の  
哥辞奴れ云。いづらとをすくく不化法ある  
行跡をりんはれへん物へ勿論つあ。ふもはりので  
あ。と雲きいす。あ。秋のいひ付と背くは不若小島り  
まはれは是むうりへはあさされと違ての禱還小亭

ついで三番上

一五



自が大小不立彼しく。コリマまづつれて行かすの芝居  
 と入まの六我候ふ万今の世不芝居と嫌ふ入れ  
 そいあひつらあめ。たまけいひあひつらあめ早く  
 はなせつとらふと女房が敷色うて。いふよまあま  
 とく付の娘とせられどとあひと悪名を付らう  
 いらふとも女の一分まきつて先祖の家名までよこせぬ。  
 いらふとも女房あり。身不肖なれども。いふ先祖の  
 長尾景虎入彦彦信の家名大早由良之助清正が孫

廿ふつれて町ノ風情の女房ふあると。世念あるふせられ  
 そこあひの白痴者のととせられ。いふ状もあままでの  
 恥辱をれば。近以相手ふへ不足ふなむれども。夫婦の  
 よみみ相あひつて。追まれば。嫌いと。思ひ定む  
 のは用なきあるべし。長持より刀取出。サアけい方うら  
 打ちけませうり。個しとあさうら打ちけらうらと。孫  
 えん川ろび屋合縁ふあるつめくれ。高まの敷を  
 ざめて。くけい。くねお。後立。何も悪の風で。サシこ



幸平宿

日光賦程元圃雜記 栗橋二里之丁八所公三里半  
 松福寺宿北面の方より大門小大松樹あり  
 淨土宗と寺領二十石年尊ハ不動寺より  
 比丘尼川 内古摩寺 高須賀  
 小羽橋 古利根寺 本と橋  
 外古麻子 寺傳の箱ありて  
 小右馬村 川ありとも  
 此村の向長と一里半余をて長し  
 堤小登れハ東に樹林の向より往  
 利根川の流と源と西に堤上灌莽の  
 るに村邊まきとありてをく置きて  
 なる宗と一葉橋の子あり葉橋  
 の石物ありと



幸平宿長崎屋六家小大雅寺  
 の古一標標と居ハ其披物ありと  
 わり世の好より知られと知る

町並石馬助町 文喜町 中町  
 荒町 寺社神明社 金蔵院  
 浄土宗 檀葉寺 天石寺 常光寺  
 月妙院 禪宗 宝持寺 十石  
 日 中曾根屋福寺 善宗 聖福寺  
 村並内西府同村 高須賀村  
 出羽橋 高須賀八向 外西府同村  
 新橋 高須賀 川分村 古子村  
 小右馬村



松次  
 寫意



であらう。少々夫婦の津のらる易とそとのよめの平小治人  
 くつと隙をさげると女房がせらあつてさへくみまんの  
 ろままひ相より果一状と付られ返りのはまきさく  
 武士乃あちかれつとあまのまへへここの女房が  
 討たさうとひひつけられ。控地せのよ男小狐合ぬ  
 比真のなり。サア為るは務負あれ女あれどもまじうの  
 胸首とつて判刀をさへごらんごらん。爺状の秘  
 袴の刀。男子をけれがぶくろ小腰をれ自統の時ま

是れいさだよく相果べと給るる一様。末國後と  
 手缺正家が百目穂道とて相提あて打くる銀のりの。  
 先祖三編由良之助伝及地流流の合戦あつての  
 強敵を脱離直と秘討とつけらるも。武勇の美を  
 あらう。あつたの刀をて素町人を切て刀をよぶじさう  
 かとあつた。正月小社の利揚らる。流るるよりあつて  
 美ある流一様廿四文宛あると。あつてとまはる百文  
 るどとが。今、是れとて。いふてあつた。あつた。あつて

くろく三巻上

十七





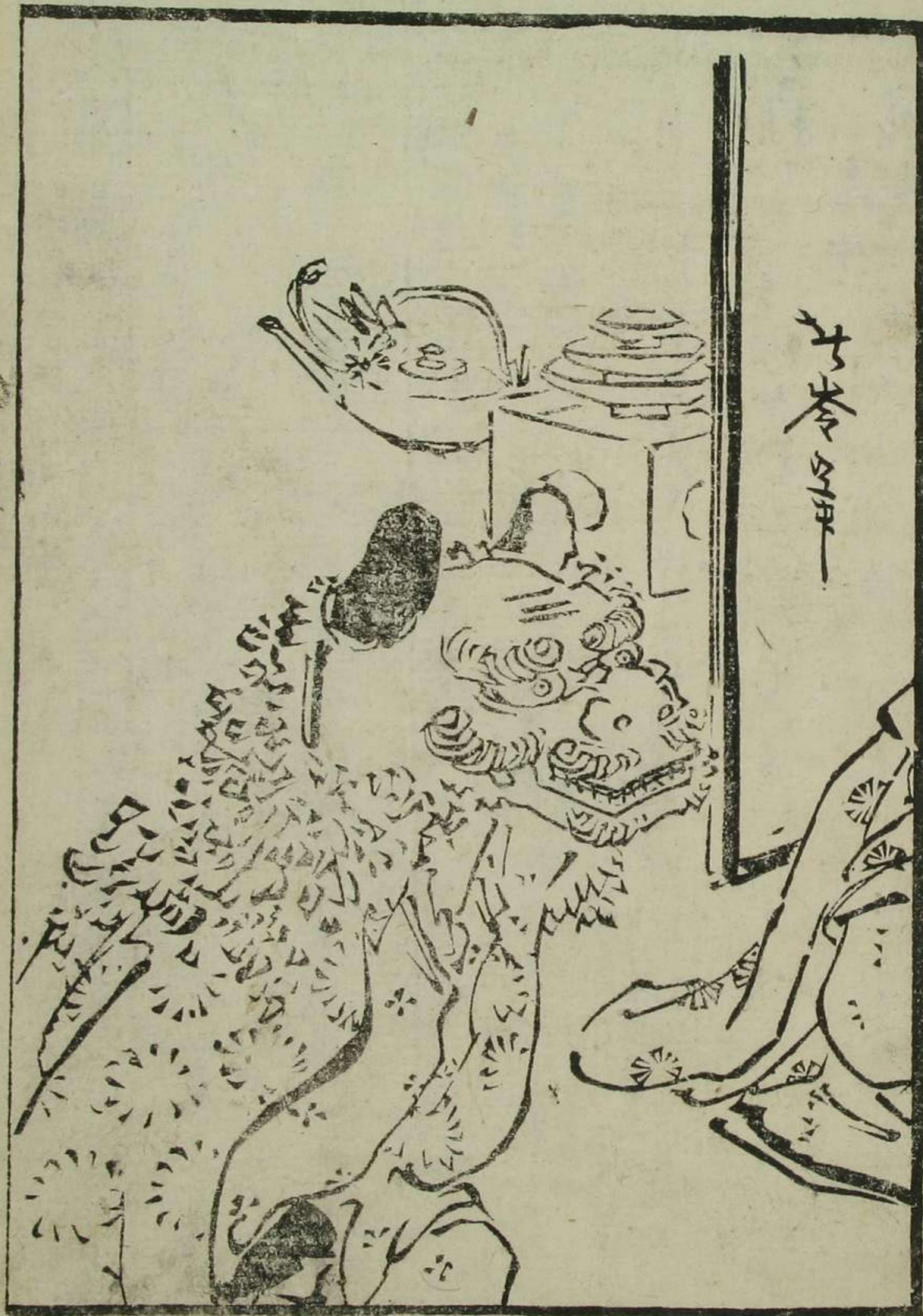


森やれ後云の森といふとんりとあく男のいふ百年も  
 昔のふ今時の娘どもも自由隊があるりのうとあれく  
 ちと床小迫付の嫁はむくくと乳あがつて乳母  
 しあつとんり乳母の猫極声でわたり理くお乳あがつて  
 かよりませと積子をまぐり母り子孫のうくふくきよせ。  
 ち乳房出せ六十七ある娘は。大振神と忌るる乳母が  
 乳房とひねらつてねらるるを舞どの余り真さめて  
 乳母コリヤどりぢやいらもわう〜うのうと回へばた極で

ござりませぬ。ちのいさの時よりねあ祝さぬは秘話余り  
 ちのこのお子のからちのさうらひぬらげ。老角山初め  
 の時のお痛がままげ〜て今まこの通りのおおれおを  
 おおて添乳のまじりばね様娘がそとねまのまお前ふり  
 余り声えのおおちちあつて〜さうりまをまひよつと森  
 つぎふくやが山まのつぎ乳母がてこぞりまのコレ小娘  
 さぬらあつ〜ちらびとあぐりにあゆめぬんねら〜と森  
 中とつげの舞の行とつぎ〜や女房のちりていあうと

女房のちりていあうと





大  
茶  
室

大  
茶  
室



大  
茶  
室

十



乳のこ子と養子ふ世やてやうをの。是も同縁の  
 あきまぬ。乳母と同ぐ申うふむうしくあつてこそ  
 命と心らの通しきどて様婚らるゝ嫁出たこれ  
 耳申すく。乳母この人をあつちかゝるゝむづりれば  
 乳母乳の毒さうふあつては様婚力あつらまをとも  
 わらうおひるまされませ。コレは猶え尻小姐さぬのねと  
 くれては様婚がわりの恥てごされとりごふくつ様え  
 ども恥念せいでば様婚ありふた神楽事しんく

いさあませうと。おま道具の申うう痛おきのを教と  
 申す。獅子殿つうてさつさまらるゝ。春前みくは  
 妾細と志るば。元の祝云の代法は各列ありあ。  
 お形入りあされても去教おて獅子舞の古実よ  
 い後学ふありまはと感や。いつのふか。あつら。かハ  
 ントかういふ嫁かどうでく。イヤくおらう。風よふも  
 真平ごぞくおあよの色くも長ゆのゆとおをを  
 おるのう「志まていひま。婚氣質の抄録ごのう」

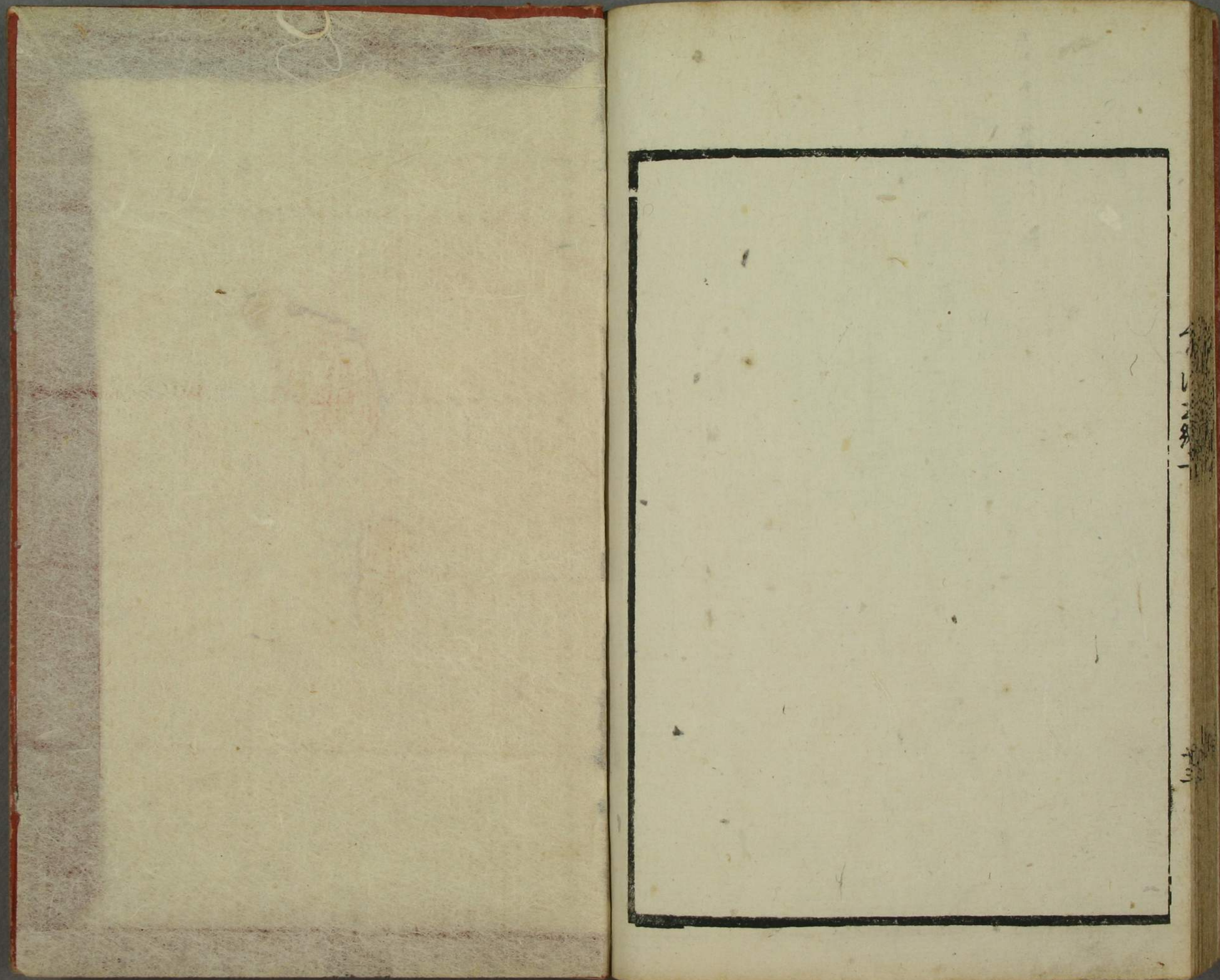


モウ嫁の相違より早く出店とて貰ひてく  
 せうぞとてうらましく行ぢいしが「イヤとまじぢやア  
 まゝ浮いておるのぢやアモウ大丈夫とておのうら  
 床へこふておるのぢやア出来ぬとお茶とて  
 家の旦那ころぬまつてだけが換ぢこのう「そりや  
 お互おれもい鼻と造つたけが換とらぬのぢや  
 何ふもウおれも深のうら今おれも藤と明日のふ  
 志母がふらぬも藤もらして藤さうくつけ鼻

せくと枕とまらけ。鼻息こつてねぢりければ  
 心も無お方面さくらそ床も思招標の志ぢ  
 あつりのころさよと女まなくあふのかきうのゆ  
 女さるゝひ小男ゆけの破法とも思ひこびて御  
 翁のあけとらよと後藤あつても藤の二笑とや  
 いふべうらん

奥羽 道中膝栗毛第三編卷之上 畢





一  
二  
三  
四  
五  
六  
七  
八  
九  
十

十一  
十二  
十三  
十四  
十五  
十六  
十七  
十八  
十九  
二十



